

Yamato Welfare Foundation
ヤマト福祉財団

ヤマトグループ賛助会員向け
ニュース(季刊)
発行部数13万部・非売品

2020.1.20 Winter

No.
65

NEWS

第20回 ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式
主催 公益財団法人ヤマト福祉財団



【第20回】ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式

一つひとつ積み重ねてきた
障がい者の働く場を広げる礎

リレーコラム
夢をつないで
第15回

京都大学教育学部教育科学科4回生
油田 優衣



Profile

1997年生まれ。福岡県立京都高等学校卒業後、2016年京都大学教育学部入学。2016年よりヤマト福祉財団奨学生。主な論文：「強迫的・排他的な理想としての〈強い障害者像〉——介助者との関係における「私」の体験から」熊谷晋一郎責任編集『臨床心理学増刊第11号 当事者研究をはじめよう』（2019年8月刊）

誰もが“自分らしく”
生きられる社会を
目指して

介助が必要な”重度障害者”——私は世間からそう呼ばれる脊髄性筋萎縮症（SMA）の当事者だ。SMAは筋力が徐々に低下していく難病で、私自身もほぼ全ての日常生活動作——着替え、トイレ、寝返りなど——に介助を要する。

そんな私は今、実家を離れ、24時間介助者を入れて、一人暮らし“をしながら大学に通っている。自分の選んだ大学で自分の選んだ学問を学び、また私生活では、自分で自分の生活の仕方を選択し、好きな時に好きなことができるという”当たり前の生活を楽しんでいる。

私がこのような生活を送れているのは、障害のある人たちの長年の「運動」があったからだ。

日本では1970年代頃から一部の障害のある人たちが、親元や施設を離れ、他人による介助を受けながら地域で暮らす「自立生活」を実践し、障害者の権利獲得に大きな役割を果たしてきた。現在私は一人暮らしをするに当たり、重度訪問介護などの公的介助サービスを使っているが、これもまさに先人たちが命をかけて闘って勝ち取ってきた制度である。今の私の生活は先人たちが紡いできた歴史の上にあるのだ。

しかし、日本の全ての障害のある人がその恩恵に与れるわけではない。障害者の地域生活への理解や制度の運用レベルには大きな地域格差があり、障害者が「自立」したいと思ってもそれが困難な地域が依然として数多く存在する。また、能力主義に染められた社会の中で、障害のある人は「生産性」や「能力」に欠けるものとして排除や抑圧を受けることもある。未だこの社会は、障害のある人が生きやすい社会であるとは言えないのだ。そして、そのような社会は、障害者だけでなく、そのほか多くの人々にとっても生きづらいものであろう。

今後私は、自分のこれまでの経験や当事者の視点を活かしながら、(本心に) “誰も” “排除せずに” “誰かが” “自分らしく” “生きられる社会” はどのようなものか、それを実現していくためにはどうしたらよいか、考えていこうと思う。

※障がいの表記について：本コラムでは著者の表記を尊重しています。

CONTENTS

表紙写真 第20回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞者の田川精二さん(左)、廣田しづえさん(右)のお二人。贈呈式会場の日本工業倶楽部にて

- 03 第20回ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式
一つひとつ積み重ねてきた
障がい者の働く場を広げる礎
- 09 夢へのかけ橋 実践塾活動報告
- 10 障がい者の働く場パワーアップフォーラム 沖縄 深掘り2019
2年目で見えてきた課題を
一つひとつ深掘りし解決
- 12 ネパール小児白内障治療プロジェクト
アイキャンプ2019とおなご先生のネットワークづくり
- 14 助成先レポートVol.40
特定非営利活動法人EPO EPO FARM(静岡県富士宮市)
ママたちの挑戦! 牧場づくりで笑顔をみんなに
- 16 この街で、一緒に生きていく。障がい者のクロネコDM便配達事業
道が凍結する日も、雪泥の日も。
自転車で、あせらず、確実に。



一つひとつ積み重ねてきた
障がい者の働く場を広げる礎いすえ



写真前列左から受賞された田川氏令夫人、田川精二さん、廣田 しづえさん、廣田氏ご令息。後列左より森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、芝崎健一ヤマトホールディングス(株)代表取締役副社長、神田晴夫ヤマトホールディングス(株)代表取締役副社長、山内雅喜ヤマト福祉財団理事長、長尾 裕ヤマトホールディングス(株)代表取締役社長、森 日出男 ヤマト運輸(株)代表取締役会長、栗栖利蔵ヤマト運輸(株)代表取締役社長



受賞者に贈呈したのは、正賞として雨宮 淳氏のブロンズ像と賞状、副賞として賞金100万円の目録です

障がいのある方の雇用の拡大、労働環境の向上、高い給料の支給などに努められた2名の方を表彰するヤマト福祉財団小倉昌男賞。その記念すべき第20回の受賞者は、精神科医の田川精二さんとろうあヘルパーの廣田しづえさんです。



「田川さんの活動に協力できたことを私は誇りに思っています」と田川さんの推薦者・（社福）日本ライトハウス 関宏之常務理事



「どんな障がいがある方も輝いていける社会を実現できる、そんな勇気を与えてくれたお二人に感謝します」と選考委員のダイヤル・サービス(株)今野由梨代表取締役社長



「私たちのやってきたことが間違いではなかったという喜びと、これから頑張るパワーも一緒にいただきました」と田川精二さん

第20回の節目にふさわしい受賞者 その周りには同じ志を持つ仲間が集う

障害者週間中の12月5日、ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式を開催しました。

会場の日本工業倶楽部(東京都)には、受賞者の仕事関係者やご家族、歴代受賞者も多数出席され、和やかな雰囲気の中で贈呈式は幕を開けました。

「今回は第20回という節目の回です。節目という意味で、本年度は令和元年、またヤマトグループも11月に創業100周年を迎え、心に残る年でもあります。そんな記念すべき回の受賞者にふさわしい功績をお二人は築いてこられています」と冒頭挨拶した山内雅喜理事長は、昨秋、受賞者のもとを訪れた時のことを振り返りながら紹介を続けました。

田川精二さんは、大阪府大東市で精神科クリニックを開き、長年、地域の患者さんと正面から向き合い治療を行っています。その中でたどり着いたのが「働くことで人生が変わる、働くことこそ最高の治療」という結論でした。それを確信したのは、本賞の第11回受賞者・北山守典さんの福祉施設で精神に障がいのある利用者さんのケアを行い、その働く姿を見たときです。そして2007年、精神に障がいのある方が仕事に就き、社会参加していく支援を行う(NPO)大阪精神障害者就労支援ネットワーク(通称J-S-N Job Support Network)を設立します。

「職員のみならずはとも生き生きと働いています。特に若い方の目の輝きが違い、心から田川さんの思いに共鳴しているのだと感じました」と山内理事長。

もう一人の受賞者の廣田しづえさんは、日本初の「ろうあヘルパー」です。介護の現場で働く



中で、「コミュニケーションを取る事が難しい高齢者も、同じろうあ者のヘルパーなら理解し適切なケアができる」と実感。もともとたくさんのおうあヘルパーを育成することが必要だと気づきました。

現在、全国ろうあヘルパー連絡協議会の会長として、耳の聞こえる方と同様にホームヘルパーの資格を取得できる研修体制、働く場の創出などに尽力。職業選択に苦労するろうあ者の女性たちに、新たな希望の灯りをともしています。その一方で、(公社)大阪聴力障害者協会の副会長として、ろうあ者の暮らしを守り支えたい、多忙な毎日を送っています。

「廣田さんのもとには、いつも大勢のろうあのみなさんが集まり、笑顔であふれています。とても楽しそうに一緒にいろいろなことに取り組まれています」と訪問した際の様子を紹介しました。



「廣田さんの背中を追って、全国のろうあ女性たちも動き出しています」と廣田さんの推薦者・(一財)全日本ろうあ連盟の石野富志三郎理事長



「障がいのある方が社会に出て働く意義と素晴らしさを再確認できました」と厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部の橋本泰宏部長



「私たちの問題だからこそ、みなさんのご協力のもと、当事者の声と手によって一歩ずつ前に進んでいくことが大切です」と廣田しづえさん



主催 公益財団法人ヤマト福祉

なにがあるうと貫く強い使命感

お二人の選考経緯について、ダイヤル・サービス(株)代表取締役社長の今野由梨氏が選考委員を代表して発表しました。

「医師として初めて本賞を受賞された田川さんは、精神障がい者が働くことは、人間としても教えてくれました。廣田さんは、自らが開拓者となり、ろうあ女性がより輝き、働くための夢を広げてくれています。お二人からは、どんなことがあろうともやり通す、強い使命感を感じ、強い感銘を受けました」。

相手の気持ちを思いやる活動姿勢だからみんな一人を信じてつて行く

田川さんの推薦者は、40年来の戦友だと話す(社福)日本ライトハウス常務理事の關宏

之さんです。

「田川さんが素晴らしいのは、つねにわかりやすい言葉で親しみやすく伝えてくれること。だからみんな先生が好きになる。地元の精神障がい者にとつて、田川さんのくすの木クリニックは、どんな悩みも受け入れてくれる頼もしい大木に見えていると思います」。

さらに、病気ではなく患者さんと真摯に向き合うからこそ、彼らが心から欲している就労という希望を叶えるため周囲の非難にも負けずJ・S・Nを設立したのだと説明。そんな田川さんに共鳴し、精力的に活動を続ける若いスタッフたちにも賛辞を贈りました。

廣田さんの推薦者(一財)全日本ろうあ連盟の理事長 石野富志三郎さんも、長年苦業を共にされてきた同土です。

「廣田さんは、ろうあヘルパーを一人でも多く育成できる環境づくりを大阪府、さらに全国の行政へ働きかけています。彼女は、どんな壁にぶつかっても決してあきらめません。彼女の受賞は、私たちにとても誇らしいことであり、より多くの仲間が勇気をもらい、立ち上がることもできると思います」と喜びを伝えました。

続いて山内理事長が、正賞の雨宮淳氏作のブロンズ像「愛」と賞状、ならびに副賞賞金100万円をお二人に贈呈。田川さんを陰で支え続ける令夫人と、現在共に活動されている廣田さんのご令息に花束を手渡しました。

来賓祝辞では、厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 橋本泰宏部長より「お二人の功績は、我々が課題とする国民一人ひとりが力を発揮できる共生社会の実現の礎となるものです。私たちも全力を尽くし、取り組んでまいります」とお祝いの言葉をいただきました。

贈呈式の最後を飾る両受賞者の喜びの声(P.8に抜粋)に、惜しめない拍手が贈られました。

精神障がい者にとって働くことが最高の治療になると信じて

NPO法人大阪精神障害者就労支援ネットワーク 理事長 田川 精二さん

11月初旬、田川さんが理事長を務められる(NPO)大阪精神障害者就労支援ネットワーク=JSNを訪ねました。



さまざまな場で講演を行い、医師や関係者に指標を示されています



大阪府大東市のくすの木クリニックで院長を務め、長年、地域医療に貢献されている田川さん。写真左は主な著書・論文で「街角のセフティーネット」メンタルヘルスライブラリー 25 / 批評社刊(右)「精神障害者就労支援からみえてくるもの」日本デイケア学会誌「デイケア実践研究」2016年(中)、「精神障害者の雇用・就労をめぐる課題」公衆衛生第80巻第11号 2016年 医学書院刊(左)

精神障がい者、その治療に必要なのは患者さんと、その取り巻く環境を見つめること

田川さんが、大阪府大東市でクリニックを開業したのは約30年前。以来この地で精神に障がいのある方たちに寄り添い治療を続けています。

「開業されたときの思いとは？」

「当時、精神科医療の現状は本当にひどかったです。統合失調症の方はすぐ入院させられ、退院できてもご家族はサポートの仕方がわからず、暴れてしまうとまた入院させられてしまう、この繰り返しです。これが本当に医療なのか、そんな若い憤りみたいなものがありました」。

田川さんは、医学生時代から患者さんを取り巻く環境の大切さも感じ

ていました。

「患者さんの症状は、どんな地域でどんなご家族と過ごしているのか、環境の違いによって全然違ってくる。それを無視して単に病気だけを診ていても、正しい治療はできないんじゃないかな。患者さんと、その方が暮らしている地域の両方を見て治療をしていきたいと考え、この大東市で開業する道を選んだのです」。

障がい者と企業、双方の要望をつなぎ一人ひとりが長く働ける支援を目指す

たくさんのお患者さんの声に耳を傾けて治療を続けられた田川さんは「働くことこそ最高の治療だと考えるようになります。しかし、当初は、精神障がい者を無理やり働かせるのか、就職させて症状が悪化

したらどう責任を取るのか、精神障がい者を雇う企業はいないなど、周囲には批判の声も多かったと振り返ります。

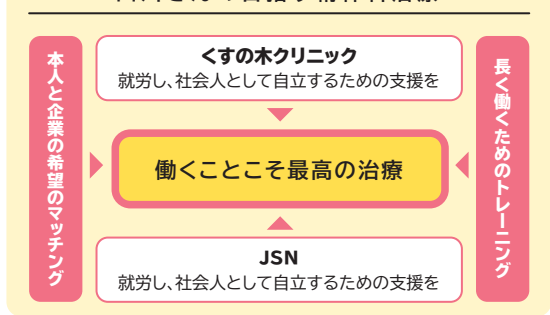
「症状の重い方は、薬だけ飲んで家に引きこもっていてもなかなか改善はできません。むしろ外に出て働いた方がよい。実際に私のクリニックに通院する患者さんにアンケートを取ると、8割が「働きたい、社会復帰をしたい」という答えが返ってきました。しかし、やっと仕事に就けたと笑顔で話されていたのに、2週間後には辞めてしまったと肩を落としていた。そんな姿もたくさん見てきました。このまま勤める・辞めるを繰り返すようなことになってはいけません。長く働き続けられるための支援こそが必要だと考えるようになりました」。

「それでJSNを設立されたのですか？」

「うちに通う統合失調症の患者さんだけでも約300名いて、全員をサポートすることは難しい。これからは複数箇所で見守りできる仕組みが必要だ」と他の診療所の先生方も話し合い、協力してJSNを立ち上げたのです。ここでは、1年半のトレーニングを経て精神に障がいのある方たちを社会に送り出しています。その際に大事なのは、雇用する側の立場や考えを理解すること。スタッフは、精神障がい者と企業、両方の希望をしっかりと聴き取り、それに合った支援を根気良く続けています」。

現在JSNは、福祉関係者や元ハローワークの所長、さらに特例子会社や一般企業などの経営者の協力も得て運営されています。

田川さんの目指す精神科治療



介護を受ける人、する人。 両方のろうあ者の生活を守りたい

公益社団法人大阪聴力障害者協会 副会長 廣田 しづえさん

お訪ねしたのは、廣田さんが副会長を務める(公社)大阪聴力障害者協会が運営する大阪ろうあ会館・介護支援課・地域活動支援センターほほえみです。



廣田さんは、この地域活動支援センターで主任、管理者も務めています



職業訓練校は、修了者代表となるほど優秀な成績で卒業しヘルパー資格も取得(写真は廣田さん提供)



訪問介護で最初に出会った方は、文字も手話も知らない高齢のろうあ者でした(写真は廣田さん提供)

ろうあ者だから
職業訓練校に入れない
そんな壁から一つひとつ取り除く

ろうあヘルパーの先駆け、若い人材育成の牽引者、聴覚障がい者が暮らしやすく働きやすい社会を築く各団体の役員など、廣田さんはさまざまな顔を持つスーパーウーマンです。当日は、(公社)大阪聴力障害者協会の運営委員長で、第12回ヤマト福

祉財団小倉昌男賞受賞者でもある清田廣さんも同席。清田さんは、高齢ろうあ者を介護の資格を持つろうあ者が支える仕組みなどを築きあげられた方です。

：お二人の出会いはこちらですか？

「はい。当時、私は会社員でしたが長時間のデスクワークで腰を痛めてしまい転職することになりました。そこでホームヘルパーの資格を取得しようと

職業訓練校の扉を叩いたのですが、ろうあ者を教えた経験がない、コミュニケーションに問題があるなどを理由に断られてしまいました。それを知った清田さんが、障がいがあるから学べないというのをおかしいと大阪府に働きかけられ無事に入学できたのです。それでも学校側は戸惑いを隠し切れません。しかし、廣田さんの人柄と考えに共感したクラスメイトがノートメイクなどに協力。廣田さんはホームヘルパー級の資格を取得し、卒業生の代表にも選ばれました。

ろうあヘルパーなら高齢ろうあ者も
気持が通じ合い
なが必要かもわかる

：現在は、ろうあヘルパーの育成などに尽力されていますが、その理由とは？

「私が初めて訪問介護を担当した高齢のろうあ者は、手話ができませんし、文字も書けませんでした。昔はろう学校に通えたのはある程度家庭が裕福な人だけだったのです。その方とは、絵を描きながら身振りなどでコミュニケーションしましたが、そういった方の気持ちを汲み取り、より適切に介護できるのは、同じろうあ者のヘルパーなのだ、強く感じたのです。廣田さんは、早速この協会の婦人部でろうあ者ヘルパーの必要性と意義を説き、その数を増やしたいと提案します。すると、私も資格を取りたいという声が高まってきました。」

「その頃はまだ大阪府のホームヘルパー養成講座に手話通訳は配備されていませんでした。そこで大阪府と交渉し、ろうあ者でも受講できるように改善していただいたのです。」

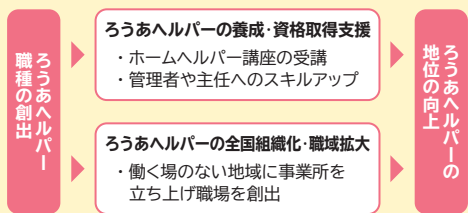
資格を取り、実際に働く人も増えてくると、その情報は他県にも広まり、全国的な活動へと発展しますが、それとともに新たな問題点も。

「たとえば、資格があっても働く場がない地域も多い。私が会長を務める全国ろうあヘルパー連絡協議会は、ヘルパーを派遣する事業所を聴覚障害者団体が立ち上げ、ろうあヘルパーが働ける場を保障する取り組みを進めています。でも拠点はまだ7カ所しかありませんから、みんなで力を合わせもつと拡大したいのです。」

介護を受ける人・する人、両方のろうあ者の生活を守るため、廣田さんの活動は続きます。

廣田さんが目指すろうあヘルパーの未来

ろうあ者の介護は、同じろうあ者なら気持を理解でき、通じ合えます。



受賞の言葉



この賞が頑張るスタッフを 勇気づけてくれます

(NPO)大阪精神障害者就労支援ネットワーク 理事長 田川 精二 さん

1951年 大阪府堺市出身。1976年に大阪大学医学部医学科を卒業。1979年 奈良県立医科大学助手、1980年 八戸ノリクリニック勤務を経て、1989年に大阪府大東市にくすの木クリニックを開設し院長へ。2012年 厚生省「障害者雇用促進制度における障害者の範囲等の在り方に関する研究会」委員。2016～2017年 厚生省「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」委員などを歴任。2007年に設立されたNPO大阪精神障害者就労支援ネットワークでは、現在も理事長を務める。

すべてはJSNスタッフの功績

この度の小倉昌男賞の受賞は、JSNの活動が評価されたことだと思つと、喜びもひとしおです。

JSNの設立から12年、約450名の方の就労を達成でき、7割近くが同じ職場で仕事を続けることができていますが、これはすべてスタッフの功績によるものです。

私はスタッフの相談役に過ぎません。私が彼らにお願いしているのは、「障がいのある方が、最初にここを訪れたときから、一人ひとりの話をしっかりと聞き、長く働き続けられるための支援を心がけてほしい」ということだけです。でもそれはとても大変なことで、彼らにしたらどうしたら良いのかと悩むことも多かつたと思います。それでもずっとそれを大切にし守り続けてきています。

今後は若い世代の後押し役

やっと就職できて、辞めてしまつ方もいます。そんな方が、再びここを訪れても、スタッフは快く再就職できるよう応援しています。企業には就職して終わりではなく、その後もずっとケアしていくことを明言していますから、安心していただけていますが、スタッフの仕事は増えるばかりです。地道な努力を続けるスタッフにとって、今回の受賞は頑張り続ける良いモチベーションにもなりました。

私は今期で理事長を降り、今後は彼らの後押しする役にまわります。安心して任せられる組織に育ててくれたことを誇らしく思っています。

受賞の言葉



ろうあヘルパーの実力と地位を 向上することが私の使命

(公社)大阪聴力障害者協会 副会長 廣田 しづえ さん

1955年 愛知県豊橋市出身。1957年 原因不明で失聴。20代からろうあ連盟などの青年部役員として活躍。1979年に結婚し、1993年に大阪府大阪市へ転居。積水ハウス株式会社・販促部に就職。1995年阪神大震災後の疲労もあり退職。その後、ホームヘルパー1級の資格を取得し、大阪ろうあ会館ろうあ者訪問家庭指導事業(平成12年訪問介護事業)・登録ホームヘルパーとして就職。ろうあ高齢者の現状を知ることでもろうあヘルパーの必要性を痛感し、人材育成に尽力。2003年に全国ろうあヘルパー連絡協議会を設立し、代表に就任。2015年 公益社団法人大阪聴力障害者協会常任理事、2018年 大阪市聴言障害者協会会長、公益社団法人大阪聴力障害者協会副会長、大阪市障害者施策推進協議会委員、一般財団法人大阪市身体障害者団体協議会副会長、現在に至る。

障がいのある子どもたちを守るためにもヘルパーは必要

いま賞をいただいた重みと、もつと全国のろうあヘルパーさんにたくさん元気を届けていかなければ、そんな思いを強く感じています。

じつは、私がホームヘルパーを志した理由は、もう一つあります。私の息子も耳に障がいがあり、ろう学校に通っていました。そこで重度の重複障がいの児童を持つたお母さんと出会ったのです。そのとき、あなたの息子は五体満足でいいね、私は何もできない子どもを残して死ぬわけにはいかないと言われてすごくショックを受けました。残された子どもたちの受け皿となるものは、いまの日本にいくつあるのか。私がホームヘルパーの必要性を強く認識したのは、そのときからだと思えます。

聞こえる人と同様に研修も

今後、ろうあヘルパーを増やしていくには、資格取得の支援だけではなく、聞こえる人と同じように仕事ができる実力を身につけることも大事です。それには、主任とか課長とか責任ある立場となるための研修を受けることができるように、手話通訳保証なども必要となります。厚生労働省には毎年働きかけていますが、まだ実現できていません。でも私はあきらめません。それが、ろうあ者みんなの幸せのために、私にできる大切な使命だからです。

利用者さんの給料増額へ向かって

夢へのかけ橋 実践塾活動報告



HACCPを取得した食品加工センターで衛生管理について学習



「どんな方に食べてほしいのかを思い描き盛り付けてください」と楠元塾長



お弁当のまるよしでは、働きやすい環境づくりのノウハウも

楠元塾（3期）・第2回研修会

塾長施設を見学し、調理や衛生管理のノウハウを吸収
ズラリと並ぶ惣菜を自分流に盛り付けるユニークな勉強も

利用者さんが主役となり、売れる、リピーターを増やせる弁当配食事業を目指す楠元塾。成功者のノウハウを学ぶことが一番の近道だと、11月22・23日、楠元塾長の施設・キャンパスの会で第2回研修会を開きました。

初日は惣菜などを作る食品加工センター キャンパスへ。ここは2020年度中に義務化されるHACCPの認証をいち早く取得した工場です。「いくら設備を導入しても実践できなければ意味がありません。手洗いや身だしなみをはじめ衛生管理を利用者さんと一緒に徹底していきましょう」と楠元塾長は解説しました。

続いて弁当の盛り付けに塾生がチャレンジ。目の前には所狭しとお惣菜やデザートが並んでいます。「さあ自由に弁当を盛り付けてください。ただし、だれにどんな弁当をいくらで販売するのか、原価計算も忘れないこと」と楠元塾長。塾生は、自分の作りたい弁当のコンセプトに合わせて盛り付けを工夫していきました。

翌日は、お弁当のまるよしを見学。利用者さんがより働きやすい動線や食品倉庫の管理方法など、どんな工夫を取り入れているかを実際に見て学ぶことができました。

研修最後のプログラムは、塾生が各自の施設で販売している弁当の写真を見ながら、楠元塾長が講評。「地域の食材や郷土料理に着目している点は素晴らしい。あとは原価計算まできちんと行えるようになってください」と一人ひとりにアドバイスをしていきました。

新堂塾・第5回フォローアップ研修 in 新潟

仕事での成功体験が、利用者さんの力を伸ばすカギ
二つの事業所を見学し、今後の改善点を掘り起こす

卒業後も年に1度有志が集い、利用者さんの仕事の拡大と給料増額のヒントを共有し合う新堂塾卒業生。その第5回目を11月10・11日に新潟県で開催しました。

初日は、9名の参加者が現在の活動を報告。「生活介護事業所に通う利用者さんも仕事に参加できるようにスクール形式で能力を高めています」。「新規顧客開拓に成功。治具の改良で利用者さんの力を発揮できる環境を整えました」。「単価の良くない仕事をカットし、施設外就労などに力を入れて、工賃約1万円増額に成功しました」。

こうした取り組みに対し、新堂塾長は「利用者さんは、より多くの成功体験を積み重ねることで仕事への意欲も増えます」と講評。アドバイザーの菅野 敦教授も「大切なのはどう評価してあげるか。自分の存在や役割を意識し、達成感を体感できるアプローチを目指してください」と伝えました。

翌日は、事業の柱であるウエス加工に続く新事業の創出を課題にしている（社福）新潟市中央福祉会「ワークセンターひがし」へ。利用者さんの仕事と商品の質を向上するために、働く環境や支援方法などをどう改善していくかを見直していきました。その後、新潟県の家電リサイクル事業に福祉施設が参入する旗頭となっている（NPO）のんびり青山の会「のんびりAXIS」も見学しました。



共通の課題は、利用者さんの働く力を伸ばすためにどうアプローチしていくか



ワークセンターひがしでは、ウエス加工の様子を見学



2011年に小型家電のリサイクル事業をはじめたのんびりAXIS

沖縄 深掘り2019

2年目で見えてきた課題を 一つひとつ深掘りし解決

10月18日、沖縄コンベンションセンターで「障がい者の働く場パワーアップフォーラム 沖縄 深掘り2019」を開催しました。本フォーラムは、現地実行委員が中心となり、自ら課題を考え取り組むものです。本財団は3年計画で応援し、今年はその2年目となります。



シンポジウムでは、沖縄ならではの特性を活かして事業を展開する3人の先駆者たちが具体的な取り組みを報告しました



「初めて参加された方も、分科会で先に取り組みを進めている方たちの話を聞き、積極的に意見を述べてほしい。そこから自分にできる具体的なヒントが、きっと見つかるはずです」と山内理事長

沖縄に適した事業の具現化へ 3つの分科会で次の目標を設定

主催者挨拶で山内理事長は「障がいのある方が、地域の方に必要とされる仕事に従事し、より多くの収入を得て生活を楽しむことができる。そんなみんなが幸せになれる社会の実現に向けた深掘りを、力を合わせて進めてください」と伝えました。

シンポジウムでは、障がいのある方の働く場の拡大や給料増額で実績を上げている3名が、独自の取り組み方を報告しました。コーディネータは、

時流講座を講演されたきょうされん専務理事の藤井克徳氏です。

最初に登壇した(株)ゆにばいしが代表取締役津嘉山航つかやまつた君氏は、平成13年に石垣島へ引っ越していましたが、石垣島は状況がまったく違います。それでも地域や障がいのある方一人ひとりの個性、強みを活かせるように仕事づくり、仕掛けづくりに取り組んできました。

地元のお店や企業と協力体制を築くことで、三線が得意な方は居酒屋に、発達障がいのある高校生は児童の学習支援にと、さまざまな形で仕事づくりを支援。当事者も支援者になれる、そんな環境が着実に整いつつあります。さらに全国の異業種とのつながりを持ち、より仕事の輪を広げていく考えです。

障がい者ITサポートおきなわの管理者仲根建作氏は、車椅子ユーザーの当事者です。「私たち移動困難者を含め、働く上ですべての障がい者にIT支援は欠かせないものです。そこをいままでも沖縄になかったITサポート事業をはじめよう」と法人を立ち上げました。

仲根氏は、アウトリーチで相談に乗り、機器の貸し出しからセッティングや使い方も推進しています。「どんなに障がい者が重い方でも社会参加がしたい、仕事をしたいと願っています。その思いに応えていくためにも頑張り続けます」。

(同)ソルファコミュニティ TEAM VILLAGE 代表社員 玉城 卓氏は、農福連携をキーワードに掲げています。「一人手不足で悩む農家と働き手がたくさんいる福祉施設。互いの力を活かしてあげれば、地域活性化にもつながります」。農業は水やりや種まきなどで作業を細分化でき、それぞれに合う仕事も見つかるかと解説。

「私たちの農地は約7000坪あります。売上拡大に商品価値の高い自然栽培で野菜を作ったり、お菓子屋さんのお出賃を得てバナナビーンズの栽培もはじめました。技術面や販売先

1st

パワーアップフォーラム
沖縄 キックオフ

テーマごとに活動し、沖縄で暮らす障がいのある人に役立つプランを考える。

2st

パワーアップフォーラム
沖縄 深掘り2019

準備したプランを実行し、結果を見極めながら、さらに深める。

3st

パワーアップフォーラム
沖縄 広がり2020

各自の実践や知り合った仲間との交流の継続。

第1分科会の報告



食文化・販路開拓・アンテナショップづくり 「目指すのは、プロ意識での販売強化」

- ・認知度アップにイベントのマルシェに参加。互いの商品を事業所に置き、ラインアップの充実も図る。
- ・事業所の新しい顔、売れ筋となる新商品を試作中。
- ・どうすればより売れるようになるか。今後はそれぞれの立地、客層、ニーズ調査も進め、福祉視点ではなく、販売のプロとしての強化を図る。

第2分科会の報告



ビジネスマッチング 「ポータルサイトとイベントで情報発信」

- ・利用者さんの働く姿や能力を企業に理解してもらうため、ポータルサイトで情報を発信。
- ・人気フェスティバルを集客のヒントに、より多くの企業との出会いを設けるイベントを開催。
- ・利用者さんが力を発揮できる仕事、より単価の高い仕事を創出できるビジネスマッチングを実現。

第3分科会の報告



観光・おもてなし 「外国人観光客の喜ぶ、カプセルトイレでアピール」

- ・海外の観光客が喜ぶカプセルトイレに着目。カプセルトイレに入れる商品を検討中。
- ・メンバーの事業所を視察し、効果的な場所にガチャガチャ4台を設置。
- ・那覇のサンライズマーケットへの出店や、自分たち主催のマルシェを計画・実現する。

きょうされん
専務理事

藤井 克徳 氏

障がい者が当たり前のよう
に働く姿を見れば世間の
偏見もなくなっていき
ます。福祉が雇用かでは
なく、福祉も雇用もです。
当事者の声を大切に、今
後も仕事を創出し続け
てください。



沖縄県政策参与
(株)照正組 代表取締役会長

照屋 義実 氏

風化させてはならない
沖縄の歴史を語り継ぐ
ことは、私たちの務め
です。これからもみな
さんとともに「平和・共
生・自立」をテーマに、
現在の福祉の問題と
正面から向き合い続
けます。



(株)ゆにばいしがき
代表取締役

津嘉山 航 氏

障がいのある方が地元
で必要とされる存在と
なるには、地元文化の
継承に関わることも
重要です。石垣島で採
れる粘土の精製をす
る事業を業者の協力
を得て開始しています。



障がい者ITサポートおき
なわ 管理者

仲根 建作 氏

働き方改革でテレワー
クの可能性が広がって
います。本人のスキル
向上から、iPadの活
用や遠隔操作ロボット
などのツール改善ま
で、より多くの方が
働ける工夫を続けて
います。



(同)ソルファコミュニティ
TEAM VILLAGE
代表社員

玉城 卓 氏

365日、土に触れ汗を
流すことで、障がい
のある者も晴やかな
気持ちで働くことが
できます。農福連携
は、地元の方と一緒
に歩みを進めること
で、必ず成功でき
ると、私は信じてい
ます。



開拓などいろいろな課題はあり
ますが、地元の方と力を合
わせ一つひとつ解決して
います。
午後には沖縄県政策参与
(株)照正組代表取締役会
長の照屋義実氏が特別講
演を行い、戦前・戦中・戦
後そして現在に至る沖縄
と障がい者の歴史を紐解
きました。

「沖縄の平和問題の原
点には、障がい者問題
でもありません。平和
とは、単に戦争がない
ということではありません。
小さな子どもからお
年寄りまで、命ある
すべての者の豊かな
生活が保障されてこ
その平和です。いま
私は障がい者の働く
農場経営を計画して
います。弱者が守ら
れる地域社会を

「沖縄の平和問題の原点は、障がい者問題でもありません。平和とは、単に戦争がないということではありません。小さな子どもからお年寄りまで、命あるすべての者の豊かな生活が保障されてこそその平和です。いま私は障がい者の働く農場経営を計画しています。弱者が守られる地域社会を
現できるか否かは、福祉に関わるみなさんの手に委ねられているのです。」
その後は「共に語ろう！これからの10年」をテーマに、3つの分科会で現在進めている取り組みを検討。実際に動き出すことで見えてきた課題の解決策を、それぞれ「深堀り」していきます。

アイキャンプ2019と おなご先生の ネットワークづくり



アイキャンプ2019
531名の子どもたちが
参加しました



地域のロータリークラブが協力



はじめての眼科検診に喜ぶ子どもたち



白内障の子どもが見つかりました



斜視の女の子は手術を行います

2019年のネパール小児白内障治療プロジェクトは、目が見えなくなってしまっ子どもたちをいち早く発見するため、小学校の先生たちに眼病についての研修を受講していただき、ネットワークを作る試みが始まりました。

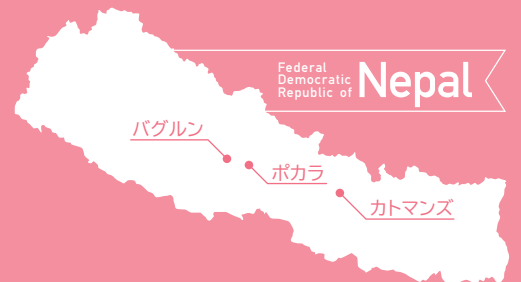
43名の子どもにはメガネを、7名はカトマンズで治療を
子どもの失明防止対策を目的に、2017年12月にヒカリカナタ基金、ヤマト福祉財団とネパールの現地医療チームProfessional Support Service Nepal(以下dusn)の間でプロジェクトの実施合意書を調印しました。昨年の10月19日、20日には、2回目のアイキャンプを実施。今回はPSNの要請により、ネパール西部のダウラギリ県バグルンで行いました。カトマンズから空路で観光地として有名なポカラに到着、チャーターした4WDで僅か

80kmの道のりを4時間かけてバグルンに移動。Amrit Adarsha セカンダリースクールに集まった子どもたちは、地域の幼稚園児から10年生まで531人。地元のロータリークラブには事前の広報活動、当日の受付、裸眼視力検査などボランティアで参加していただきました。今回、メガネが必要な子ども43人、カトマンズでの再検査、治療が必要な子どもを7人見つけることができました。メガネが必要な子どもにはその場で提供。視界がハッキリとしたときの子どもの笑顔がとても印象的でした。また、7人の子どもたちは後日カトマンズに来てもらい、無償で治療、手術を行います。

アイキャンプ実績

	診察	異常発見	手術必要
2018年	425人	24人	4人
2019年	531人	50人	7人

手術を要する子ども以外にはメガネを無償提供し、視力を矯正しました。





ポカラにあるさくら寮で研修を行いました



6時間の講義にも熱心なおなご先生たち



「おなご先生」への特別研修会

早期発見のための
ネットワークづくり

カトマンズ医科大学Prof.Sabina(PSSNリーダー)による講義

アイキャンブ活動を通じて、「もう少し早く診察を受けていれば良かったのに」と医師から言われる子どもが多いことに驚きました。もし発見が早ければ光を取り戻すことができたであろう子どもたちがたくさんいたのです。しかし、ネパールでは何かあったらすぐに病院に行く習慣がそもそもありません。眼に異常がある子どもたちをいち早く発見する情報網の整備が必要と考えました。そこで、ふるさとの村の学校で教鞭をとるおなご先生たちに、子どもたちの貴重な情報源となってもらうため、JNFEA(日本ネパール女性教育協会)様快諾のもと、彼女たちへの特別研修会を行いました。

PSSNメンバーを講師として、眼病についての初歩的な知識、病気にかからないための眼のケアにおける教師の役割、早期治療の大切さについて話していただきました。6時間におよぶ講義でしたが、おなご先生たちは熱心にメモをとり受講。帰村した数人のおなご先生からは、早速情報が寄せられてきました。ネットワークの形がみえてきています。

眼に異常のある子どもたちの
情報を得るために



一人ずつ修了証書を授与しました



全員で記念撮影

※おなご先生とは

ネパール農山村では、男尊女卑の意識が根強く、女性に対する教育が不十分でした。これを改善するために日本ネパール女性教育協会(以下、JNFEA)が、「ネパールの女性たちに教育を」という想いから、日本型女子師範学校を設立し、2年間の育成プログラムを通じ2006年から10年にわたり、自村出身の優秀な女性教師を生み出してきました。彼女たちのことを現地では「おなご先生」と呼んでいます。現在、そのおなご先生を対象に1年に1度、観光地であるポカラに集合してもらいフォローアップ研修を行っています。今回の特別研修は、そのフォローアップ研修の中で行われました。

ママたちの挑戦! 牧場づくりで笑顔をみんなに

鳥のさえずりも心地よい富士の南山麓。障がいのあるなしにかかわらず、そこに訪れる人、働く人の心を解きほぐす牧場があります。アニマルセラピーと障がい者雇用の拠点を立ち上げたのは、牧畜に素人のお母さんたち。その静かな情熱と旺盛な行動力は驚嘆するばかりです。

Data

特定非営利活動法人 EPO
EPO FARM
静岡県富士宮市



助成により、屋根を赤いペンキに塗り替えた羊舎。羊の住まいとなる羊舎の整備で完成まであとわずか



ワラ出しの作業中

羊舎・圃場を大幅拡張!

富士山の麓、森に囲まれた牧場で障がいのあるお子さん向けの自然体験やワークシヨップ、乗馬体験といったアニマルセラピーをサービースしているのがEPO FARM(以下、エポ)です。同時に就労継続支援B型事業として、その運営・整備には20名の障がい者たちも携わり、1万6000円の平均給料を表現しています。約5000坪というエポの牧場にはたくさん

の動物たちがいます。馬が7頭、ニトリが20羽、ウサギ4羽、犬・猫、それと羊が40〜50頭ほど。餌やりだけでもかなりの手間です。これは利用者さんたちの主な午前中の仕事。餌作りから始めて、水替え、清掃、定期的なワラ出し…。加えて牧場内の整備も大切な役目です。壊れてしまった設備を都度、直さなくてはなりません。また一昨年、隣接する7000坪の牧場と廃養豚場を借り受けました。これを新しい羊圃場として整備を進めています。これは、利用者さんの給料増額計画を担う重要なプロジェクトの一つです。

羊舎の屋根修理や牧柵工事、サイレージと呼ばれる餌の保管スペースの整備に、当財団のステップアップ助成金200万円を充当しました



羊を安心して放牧できるよう牧柵を整備する利用者さん

が、それだけでは賄えない部分、自分たちで整備できるところは、利用者さん自ら整備しているのです。

必要なもの、欲しいものは作っちゃえ

始まりはママさんたちのボランティア・グループでした。保育士の資格も持ち、エポの発足から関わる高橋^{たかはし}智理^{ちり}理事長に訊ねました。

「本当は児童館が欲しかったんです」地域には児童館がなく新設を模索しましたが、それは資金的にも手続的にも難しいことでした。そこでハードルを下げて「学童保育をみんなで始めることにしました。それを開放して児童館みたいにして遊んでいただけです」

移動動物園を呼んだのは、翌2002年のお祭イベントのことでした。これが大好評。以後、毎年恒例になりましたが、年1回じゃ足りないという声に押され、「それならいっそ飼えばいいじゃん、みたいな」(笑)

土地柄、かつて馬を飼っていた家も多く、協力を申し出た建設会社の社長は「じゃー、小屋を作ってやる」とエポを持ってきて半日で小屋ができて、「わーすごい!。あつという間に即席の牧場ができあがったそうです。この牧場がエポの原型になりました。



朝の厩舎での作業



育てているのはラムの王様と言われる、貴重なサウスダウン種。後に見える白いハウスは助成で整備した飼料(サイレージ)の保管スペース



EPO FARMが提供する、障がい児・者を対象としたホースセラピーのワークショップ

羊毛がコースターやぬいぐるみなどさまざまなクラフトに生まれ変わる。「ひつじまみれ」シリーズとして、併設のカフェで販売

「牧畜のノウハウは一から勉強。静岡市内の乗馬クラブや地元の試験場、獣医さんに相談しながらやってきた」と語る高橋智理事長

労働組合支部執行委員長 助成先訪問 Series 35

ヤマト運輸労働組合
東静岡支部執行委員長
藤村 勲さん



この感動に、きっとまた足を運んでしまう

さまざまな人が集まってくる施設を作られて、素晴らしい活動だと思いました。歩いてみて、単なる農場ではないと実感し、その奥深さに驚きと感動を覚えました。

とにかく理事長の高橋さんが前向きな方で、いろいろなことを考えながら活動されていることにも、一個人として本当にすごいなと…。来てよかったと実感しています。

助成金がどのように生かされているのか、今日は組合員を代表して私がお伺いした格好ですが、支部役員などみんなを連れてきて、こういう頑張っている福祉事業所があるんだということを見せたいと思いました。



二兎を得るソーシャルファームの誕生
当初は必ずしも障がい児者を意識していたわけではありませんでしたが、「お母さんの中には障がいのあるお子さんを抱えている方もいて、障がいの有無にかかわらず一緒にいって互いに理解しながら育てていくのが大事だなんて…。そのうちに自閉症の子と馬はとても相性がよいこともありありと分かってきました。加えて、こんな話を聞くことになりました。障がいのあるお子さんのお母さんから「高校を卒業したあと働く場がない。朝、お馬さんの世話をし、時々は乗せてもらって、息子にできることもあるから、お金は要らないので牧場に通わせてもらえないか」と。そこで初めて障がい者の就労の場が不足している実態を知った高橋さんたちは、牧場とは別

に、障がい児・者のホースセラピーに特化した事業にする就労支援事業所を立ち上げました。こうして2010年に誕生したのがエポです。その後は当財団のパワーアップフォーラムにも参加し刺激を受け、カフェを併設したり、羊肉の出荷や羊毛を生かしたクラフト作品の販売など、活動の幅を広げることで給料アップを図ってきました。
羊舎が完成すれば徐々に羊を増産し、出荷数のアップが見込めます。また、これまでの乾草牧草から保存の利くサイレージに切り替えることで飼料を1/5に抑制。2020年度にも給料を2万円の大台に乗せる手筈です。
「これからも周りの人たちと、地域を耕せていきたいら…」エポの取り組みは皆の思いに後押しされてますます広がっていきそうです。

この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコDM便配達事業

道が凍結する日も、雪泥の日も。 自転車で、あせらず、確実に。

● 北上市二子町秋子沢

岩手県の南西部にある自然豊かな町、北上市。JR東北本線北上駅から車で約10分の郊外に、社会福祉法人いわて共生会「あけぼの」があります。クロネコDM便配達を担当して、すでに14年目。農地や工業団地などを含むかなり広いエリアを、毎日約160冊、3人のメイトさんが自転車で配達しています。



自転車で配達するメイトさんの八重樫敦さん(左)、佐藤和貴さん(中)、千葉公雄さん(右)。カタログなどの重いDM便が多い時は、自転車の前後の荷物を均等な重さにしないと、ハンドルのコントロールが利かなくなることも。配達冊数が多い時は、職員の佐藤さんが配達先のメイトさんへ届けることもあります。

社会福祉法人いわて共生会「あけぼの」がクロネコメール便事業(後にDM便)を開始したのは、2006年。メイトさんに適任と思える利用者さんがいたことから、事業をスタートさせました。しかし、そのメイトさんは配達の大変さにギブアップしてしまいます。

そこで、後を担当したのが、八重樫敦さん。メイトさんにふさわしい真面目で、すでに12年以上続けています。また、八重樫さんの仕事ぶりを見て、やりたいと手を挙げた佐藤和貴さんは、8年以上のキャリア。そして3ヶ月前、見習い期間を経て立ち上げた千葉公雄さんが、ここに加わりました。八重樫さんをリ-



手際よくDM便を仕分けする千葉公雄さん。棚は、事業所を新築した際に作られたものです。

ダーとする3人のメイトさんたちが、責任をもって担当エリアを配達しています。

● 岩手主管支店 北上流通センター

面積86.2km²/人口25,188人/世帯数9,956世帯

● 社会福祉法人いわて共生会「あけぼの」

2006年12月、クロネコメール便(後にDM便)をスタート。1日の配達冊数は平均約160冊。他には、キム子漬などの漬け物作り、農産物加工、卸販売、清掃など。

「障がい者のクロネコDM便配達事業」

参入施設数 315施設 従事者数 1,510人(2019年10月現在)

お問い合わせは……(公財)ヤマト福祉財団 DM便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

<https://www.yamato-fukushi.jp/>

※ 2015年4月1日より、クロネコメール便配達にはクロネコDM便配達へと変わりました。

ウソをつかず、真面目なことで メイトさんの必要条件

「あけぼの」職員の佐藤宗徳さんは、メイトさんとしての条件は「ウソをつかないこと」だと話します。「誠実で真面目なら、たとえ間違えても、反省してしっかり修正すれば、その経験が自信になっていく」と。

最初の1年は職員と一緒に配達。少しずつメイトさんに任せる度合いを増やして、遠くで見守るようにしたそうです。「独り立ちの日、困った時は電話をする



▲届け先に人影がなくても、ポストに向かって必ず「DM便です！」と声をかけてから投函する佐藤和貴さん。ポストの代わりに、保冷バッグや冷蔵庫、トランクなどを使っている家があって、それがおもしろいと話します。
▼メイトさんになってから一人暮らしを始めた八重樫敦さん。フライングディスクのスポーツ大会に出るための旅費を貯金しているそうです。



▲いつも配達する理容室へ、「DM便です！」と元気な声で届ける千葉公雄さん。「汗っかきなので、夏は何度も着替えませう」。メイトさんになってから10キロ痩せたと嬉しそう。

ようにと言って送り出したものの、心配で電話ばかり気にしていました。でも、今ではすっかり安心して任せています」と語ります。道が凍結した日などは安全第一で、時間がかかっても確実な配達を心がけると、午後の配達が終わらない時はあせらず翌日に回すこと、などをアドバイスするそうです。

リーダーになんでも相談 すぐに答えてくれるから安心

朝、DM便が届くと、3人はまずエリア別に分類。次に、自分が担当する地域のDM便を、住所別に棚の中に入れていきます。その後、地図に配達先の小さなシールを貼り、配

達ルートを決めます。

千葉さんはまだ不慣れなこともあり、配達ルート選びに迷った時は、八重樫さんに相談。佐藤さんもわからないことや不安に思ったことは八重樫さんにアドバイスを求めます。どんなことにもすぐに答えてくれるので、八重樫さんは2人にとって頼れる存在です。

最後に配達順にDM便を並べ替えて、仕分けは終了。3人のメイトさんは、絶妙なチームワークで、毎日仕事を順調に進めています。

頻繁にタイヤがパンク 湿った雪の日は大変

「あけぼの」のメイトさんは、およそ5キロ四方に及ぶ広いエリアを、四季を通して自転車で配達しています。長い坂道があるので、変速スイッチがついた自転車でもかなりハード。畑や工業地帯では、強風が吹き抜けます。

最も大変なのは、12月の終わりが

ら3月までの降雪期。とりわけ道が凍結すると、滑って転ばないように注意が必要です。また、湿った雪の降った日や春先の雪解け時には、泥混じりの雪が自転車の泥除けの内側に入ると、タイヤが回らなくなることも。パンクもたびたび起きます。そんな時は電話で、職員に佐藤さんにSOS。迎えに来てもらって、施設でパンクを修理してもらいます。タイヤの状態をそれぞれが気にかけていても、朝、配達前に空気が抜けていて慌てることもあるとか。職員の佐藤さんはすっかりパンク修理が得意になっているそうです。

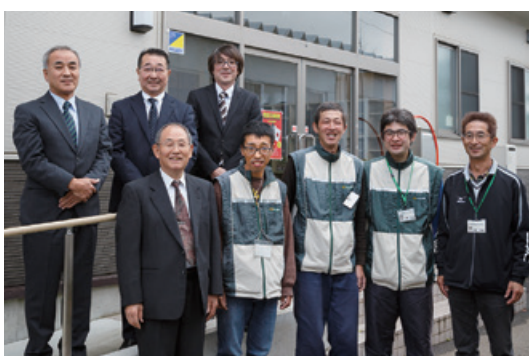
手を抜かない熱心さに感動 長く続けてほしい

ヤマト運輸右手主管支店 北上支店 東公一支店長は「どんな悪天候にもめげずに続けていて、とても頼もしい。この周辺は、市に企業が誘致されて団地が増え、通勤族が多いエリア。届け先がわかりにくいことも多いと思う。もっとヤマトのドライバーが持っている情報を、メイトさんと共有しなければと痛感した。これからも安全と正確性を第一に続けてほしい」と話します。

ヤマト運輸右手主管支店 サービスセンター 長沼一彦サービスセンター長は、メイトさんたちの仕事ぶりに感心します。「DM便を投函する直前に、ポストの前で端末機を操作するというルールをきちんと守っている。誤配もほぼなく、ていねい



(右)「あけぼの」施設長の市橋博さん「月に20日間、休まずに任された仕事を続けると、人は確実に変わってきます。風邪もひかず、悪天候にもくじけぬ。しだいに自信が生まれ、自分の意見をしっかりと言うようになりました」。(左)職員の佐藤宗徳さん「DM便配達を利用者さんにとって憧れの仕事です。やりたいう若い子を育ててあげたい。いつかヤマトさんから、もっと広いエリアをやらなにかと声をかけてもらえたら、いつでも応えられるようにしておきたい」。



前列左から／社会福祉法人いわて共生会「あけぼの」施設長 市橋博さん、佐藤和貴さん、八重樫敦さん、千葉公雄さん、「あけぼの」職員 佐藤宗徳さん
後列左から／ヤマト福祉財団東北支部 小原守事務長、ヤマト運輸右手主管支店 サービスセンター長沼一彦サービスセンター長、ヤマト運輸右手主管支店 北上支店 東公一支店長

に仕事をしていることが分かる。地域を熟知していることもすばらしい。メイトさんは私たちの強い味方。これからも怪我なく、事故なく、長く続けてほしい」と語りました。

「いつも「苦労さん」と言われるのが嬉しいというメイトさんたち。町の人を見かけたら、自分の方から挨拶をします。一つ一つの仕事を積み重ねて生まれた自信が、3人を輝かせています。そして今日も、「おはようございます！」という元気な声とともに、一軒一軒ていねいにDM便が届けられています。

株式会社山元／百貨店、ホテル、イベント会場での催事などで使う什器をはじめあらゆるアイテムのレンタルを行っています。全国で20名の障がい者スタッフが活躍しています。



パネルを扱うフロアのみなさんと。杉崎係長(右)、柴田さん(右から3番目)

夢は、免許を取って 大好きな車を買うこと

スワンでも、休み時間には外を走る大好きな車を見ていた柴田充さん。今は、ヘルメットを被って大きなパネルを持って広い倉庫の中をあっちへ、こっちへと汗だくです。その姿に働く人の責任感や頼もしさが見えてきました。

■ヤマト自立センター スワン工舎 就労に必要なスキルの習得はもちろん就労先の開拓からジョブコーチによる就労後のサポートまで一貫したプログラムで、障がい者の自立支援に取り組んでいます。

2018年7月に入社したときは、催事で使われた冷蔵庫や調理機器などの清掃を担当していました。最初に仕事を教えてくださった指導者の柴田守雄さんは「最初は体力がついて行けず、重いものを持ったら身体が震えちゃうこともありました。だんだん身体も仕事の流れもわかかってきて、力が付いてきました」とお孫さんのような感覚で柴田さんと接してくださいます。

半年前から、力が必要なパネルの清掃、片付けを行うフロアに異動しました。山元で扱うレンタル商品は、7000位のアイテムがあるので、新入社員が入ってもすぐには覚えられない

催事で使う什器やパネル、冷蔵庫、調理機器などのレンタルから会場の設営まで手がける株式会社山元。その所沢商品センターが柴田充さんの職場です。

冬の寒さも夏の暑さも乗り越えた 倉庫作業の1年間



重いパネルをしっかり持って、広い倉庫を動き、片付けをするのが得意になったと、柴田さん

柴田 充さん 株式会社山元(平成30年7月1日入社)

休みの日は、スワンの交流会に行ったり、本屋さんで大好きな車の本をチェックしたりしています。



入社当初の清掃メンバーと。右から2番目が、柴田さんに仕事を教えてくれた柴田さん

「次は、注文票を見て、必要なアイテムをお客さまごとのボックスにまとめる出庫準備ができると、もう一歩成長ができますね」と杉崎係長。柴田さんの動きに頼もしさと責任感が見えてきました。

「社員が出社する前に柴田君たちが、戻ってきたものをここまで片付けてくれるから、担当社員は入社してすぐに次の出庫準備に取りかかれます。以前は、倉庫に戻ってきたものがたまっていて、それを片付けてからでないと出庫ができなかったんです」と、社員の指示もなく仕事を進めている柴田さんにびっくりされています。

「先輩はみなさん優しく、片付けはまだまだだと思いますが、少しずつ覚えられたことがうれしいです」と柴田さん。

24時間体制で動いている倉庫では、戻ってきたレンタル商品をどんどん片付けていかないと、次への出庫準備ができません。所沢商品センター係長の杉崎進也さんは、

YWF TOPICS

自然栽培パーティ 台風19号直後の稲刈りに大奮闘!!



ヤマトグループ社員の子どもも稲刈りをお手伝い



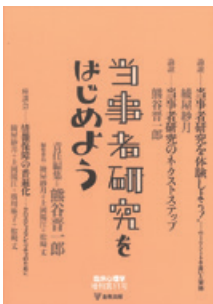
みんなで協力して稲架けを行いました

10月14日、自然栽培パーティ会員施設であるNPO法人多摩草むらの会の田んぼ(東京都八王子市)で雨天の中稲刈りを実施しました。6月に田植えた稲が実ったものです。関東地方等に甚大な被害をもたらした大型台風19号の後で、泥のぬかるみに足をとられ、作業は難航しましたが、自然栽培で育った稲はたくましく成長し、稲架けがめで完了できました。ヤマトグループの社員、家族約10名と利用者の方と一緒に作業を行い、悪条件のなか約1反の田んぼから収穫できたことによる達成感を全員で味わいました。

強迫的・排他的な理想としての〈強い障害者像〉

一介助者との関係における「私」の体験から

京都大学教育学部教育科学科 油田 優衣
熊谷晋一郎責任編集『臨床心理学増刊第11号 当事者研究をはじめよう』(2019年8月刊)より



本誌2pのリレーコラムに登場する油田さんが発表した論文です。1日24時間ほぼすべての日常生活に介助を必要とする油田さんは、脊髄性筋萎縮症(SMA)という難病の当事者。油田さんはこの中で、先駆的障がい者たちの活動により獲得できた現在の介護保障制度に感謝する一方、自立生活を求める障がい者は自分ですべてを決める〈強い障害者〉でなければならないという自身の思い込みが誤りだったことを指摘します。障がい者は介助者とともにあり、介助者の影響を受けながら自分を出て行くのが本来のあり方ではないかと投げかけます。読む人に障がい当事者と介助者との関係性を考えさせるきっかけを与えてくれる内容です。

クロネコDM便配達本人による特別報告会

全国に319ヵ所、約1600名の方が活躍されているクロネコDM便配達事業。地元で報告会の開催を希望する施設を公募し、そこで配達する施設の報告会です。

社会福祉法人はる しごと(東京都世田谷区)

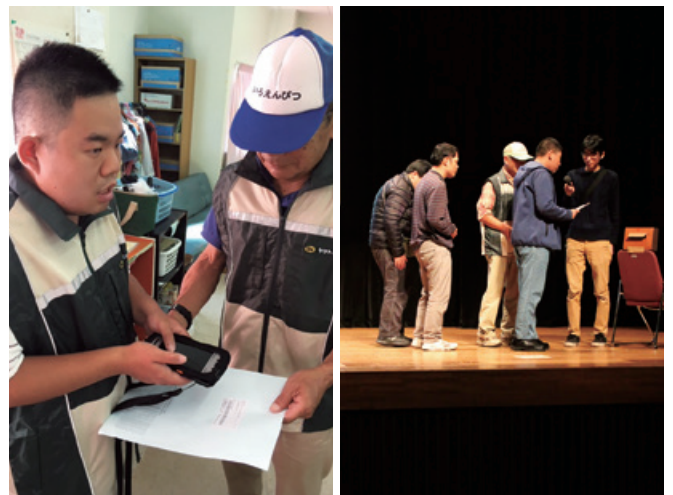


「しごと」は、11月12日に等々力地区会館で報告会を開催しました。2004年からクロネコDM便の配達を始め、15年になります。

現在は月約2万冊を配達しており、配達量は障がい者施設では全国一位です。

報告会には50名ほどの参加者が集まりました。3名のクロネコメイトさんがクロネコDM便配達の仕事内容や工夫、日々感じている苦労や楽しみについて報告しました。配達先で「ありがとう」「おつかれさま」と声をかけてもらうことがうれしいといいます。質疑応答もあり、参加者からの質問に自分たちの言葉で丁寧に説明していました。

NPO法人いろえんぴつ心理福祉コミュニティズ いろえんぴつ(横浜市港北区)



11月21日に横浜ラポールで「いろえんぴつ」が約140名の参加者を集め報告会を開催しました。2009年からクロネコDM便配達を始め、現在は20名で1日平均50~60冊を配達しています。

いつも配達するときは、職員とメイトさん数名がグループで配達します。投函先の住所を確認、端末操作も確認をしながら慎重に行い、丁寧にポスト投函し配達している様子を壇上で演じ、来場者にみせてくれました。

またクロネコメイトさんがインタビュー形式でやりがいを感じて配達していることを発表し、これからも配達を続けていきたいと元気に報告しました。

大浮世絵展

歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演



東洲斎写楽「3代目大谷鬼次の江戸兵衛」江戸時代/寛政6年(1794)5月、大判錦絵、ベルギー王立美術歴史博物館 Royal Museums of Art and History, Brussels
展示期間：2020年1月28日～2月16日(福岡会場)



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」江戸時代/天保2-4年(1831-33)頃、大判錦絵
ミネアポリス美術館蔵 Photo:Minneapolis Institute of Art
展示期間：2020年1月28日～2月24日(福岡会場)



歌川広重「東海道五拾三次之内 蒲原 夜之雪」江戸時代/天保5-7年(1834-36)、大判錦絵、ミネアポリス美術館蔵 Photo:Minneapolis Institute of Art
展示期間：2020年1月28日～2月24日(福岡会場)



歌川国芳「相馬の古内裏」江戸時代/弘化2-3年(1845-46)、大判錦絵3枚続 展示期間：2020年2月26日～3月22日(福岡会場)

東京オリンピックに合わせて再び浮世絵展

1964年10月、先の東京オリンピックに合わせて「オリンピック東京大会組織委員会協賛芸術展示 浮世絵・風俗画名作展」が国際浮世絵学会(当時、日本浮世絵協会)の主催で開催されました。そして2020年、再び東京にオリンピックがやってくる時期に、浮世絵の素晴らしさを紹介する展覧会が「大浮世絵展」として開催されます。

本展は、2014年に開催し、全国で38万人を集め、浮世絵ブームを作り出した「大浮世絵展」に続く展覧会です。

歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演

今回は、浮世絵の歴史の中でも、キラ星のごとく輝いた人気絵師である喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳の5人にフォーカスし、国内のほか、欧米の美術館等から傑作だけを集めました。各絵師のエッセンスであるジャンルに絞り、誰もが見たことのある作品が並び、展覧会五つが一堂に会したような豪華な内容になっています。

本展では、国際浮世絵学会の監修のもと、国内外の保存状況の良い優品を集めました。浮世絵本来の鮮やかさをどうぞお楽しみください。

本展はヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社が作品の輸送・展示をしています。

DATA

- 開催期間 ▶ 2020年1月28日(火)～3月22日(日)
※会期中展示替えあり
- 休館日 ▶ 月曜日
(月曜日が祝日・振替休日の場合はその後の最初の平日)
- 開催場所 ▶ 福岡市美術館 特別展示室
- アクセス ▶ ■市営地下鉄空港線「大濠公園駅」3・6番出口より徒歩10分、七隈線「六本松駅」2番出口より徒歩10分
■西鉄バス「福岡市美術館東口」バス停下車徒歩3分、「赤坂三丁目」バス停下車徒歩5分、「福岡城・NHK放送センター入口」バス停下車徒歩3分
- 開館時間 ▶ 9:30～17:30(入館は閉館の30分前まで)
- | | | | |
|-------------|-----------|------|-------|
| 観覧料
(税込) | 一般 | 高校生 | 小・中学生 |
| | 当日 1,500円 | 800円 | 500円 |
- ※一般は18歳以上、高校生は18歳未満
※身体障害者手帳等をご提示の方およびその介護者1名は無料
- 主催 ▶ 国際浮世絵学会、福岡市美術館、読売新聞社、FBS福岡放送、チケットぴあ九州
- 協賛 ▶ 光村印刷
- 問い合わせ ▶ TEL 092-714-6051 福岡市美術館
<https://dai-ukiyoie.jp/>
- 巡回情報 ▶ 愛知展 愛知県美術館
2020年4月3日(金)～5月31日(日)

ご協力ありがとうございました

スワンのクリスマスケーキ

令和元年のスワンのクリスマスケーキはいかがでしたでしょうか。

おかげさまで、12月に販売したクリスマスケーキは、全部で91,139個となりました。

ヤマトグループのみなさま、ご協力ありがとうございました。これからもみなさまに喜んでいただけるよう、スタッフ一同邁進していきます。

これからもよろしくお願いいたします。



株式会社スワン

